

探訪 北の風景 ①

市街地のシンボル空間に 大通交流拠点地下広場・札幌市

青木和弘

今冬は台風並みに発達した低気圧が札幌を頻繁に襲い、激しい吹雪にさらされた。雪国では、風雪や雨にじやまされない地下街は実ありがたい存在だ。

さっぽろ雪まつりが開催される前日の2月4日、札幌市「地下鉄大通駅コンコース」が、「大通交流拠点地下広場」に生まれ変わった。防火処理を施したヒノキ材で作られたテーブルやベンチがコンコースの中央付近に配置され、観光客や買い物客、待ち合わせの市民らが、腰をおろしてくつろぐ姿が見受けられる。

同コンコースは、駅前通と大通公園が交差する、まさに市街地の中心。1971年に開業した地下鉄南北線大通駅の南と北の改札口があり、地下街のオーロラタウンとポールタウンを結ぶ。

2011年3月には札幌駅前通地下歩行空間（愛称「チカホ」とつながり、札幌駅北口方面からスキノまでが地下で結ばれ、古い施設が残ったままだった「コンコース」部分の改良工事が仕上げられていた。

13年8月から始まったこの工事で、コンコースに点在していた同市の「大通証明サービスコーナー」や「大通情報ステーション」、「中央図書館大通カウンター」などが北側に集められた。

民間テナントの「セブンイレブン」「ミスタードーナツ」「元氣ショップ」は、一足先に昨年12月、南改札口側に移転している。

また、地上との出入り口となる「出口5」「出口6」の建設工事も行われ、「出口5」には自然光を取り入れたらせん階段や、彫刻の設置などが行われた。

この事業は同市の「都心まちづくり計画」（02年）をもとに、周辺地権者らによって「大通交流拠点まちづくりガイドライン」（07年）がまとめられ、それらを補完する市の「都心まちづくり戦



地下鉄南北線南改札口側にコンビニなどがある

略」（11年）がつけられた。具体的な事業である「大通交流拠点地下広場整備基本計画」（12年）には、パブリックコメントが16件寄せられ、多くは人の流れと動線の確保などについての意見や要望で、そのうち12件が計画に取り入れられた。

市の都心まちづくり課によると、総工費は22億円とされ、10億円が国からの補助で、残る12億円が札幌市の負担となり、起債などで賄われている。残る工事は、人のスムーズな流れを確保するための移転施設撤去や設備の更新などで、15年度に完了する見込みだ。

大通り情報センターには「まちづくり活動情報





大通交流拠点地下広場の滞留スペースにはベンチとテーブルが設置された



大通り情報センターを訪れた市民

「コーナー」があり、市民団体などが制作したイベントなどの案内チラシが目につきやすいように置かれていて、情報を知りたい市民が足を運び、好評だという。

ただ、地下街に設置されたベンチが、「ホームレスがたむろして利用しづらい」などの苦情で撤去された経緯があり、新たに設置されたテーブルでは、飲食物の食べこぼしやゴミの置き去りが心配されるものの、テロで爆弾が仕掛けられる恐れがあるという理由でゴミ箱は設置されていない。

札幌のシンボルの位置に配置された「交流地下広場」は、通路とは違い、清掃・管理にも気をつかう存在になりそうだ。